

# 平成22年度 前期授業評価アンケート結果

## <現状と課題>

「基礎ゼミナールの授業評価について」

横田 佳之 (基礎ゼミナール部会長、都市教養学部理工学系准教授)

「都市教養プログラムの現状と課題」

佐藤 潔 (都市教養プログラム部会長、都市環境学部准教授)

「実践英語教育 - 授業評価の検討とこれからの展望 -」

福間 健二 (英語教育分科会座長、都市教養学部人文・社会系教授)

「情報リテラシー実践Iにおける授業評価の経年変化」

永井 正洋 (情報教育検討部会長、大学教育センター教授)

「理工系共通基礎科目の授業評価結果について」

加藤 直 (理工学系FD委員会委員長、都市教養学部理工学系教授)



# 基礎ゼミナールの授業評価について

基礎ゼミナール部会長  
都市教養学部理工学系准教授

横田 佳之

## はじめに

「基礎ゼミナール」は、  
「考える・調べる・発表する」  
という作業を通じて、  
「課題発見能力・問題解決能力・自己表現能力」  
の育成を目的とするゼミナール形式の授業で、1年前期の必修科目です。今年度は、受講生1674名に対して81クラスが開講されました。本稿では、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が平成22年度に実施した「基礎ゼミナールの授業評価アンケート」の結果について、その概要を報告します。

## 調査対象と回収率

調査対象は、受講学生および授業担当教員で、受講学生1674名中1407名（回収率84.1%）、授業担当教員81名中71名（回収率87.7%）の回答があり、高い回収率となりました。以下、学生・教員による授業評価をそれぞれSE・TEと略記します。

## 質問項目

質問項目および略称は表1の通りです。問1から問8まではいわゆる「共通事項」で、他の教養科目と同じ設問ですが、問9から問12までは基礎ゼミナールの「個別事項」となっており、基礎ゼミナールの目標である課題発見・問題解決能力（問10）、自己表現能力（問11）の達成度に関する設問を設定しています。また、1クラス24名以内という制約のため、必ずしも第1希望のクラスを受講できない場合があることをふまえ、テーマに対する関心（問9）についての設問を設けていますが、今年度は、新しく自由記述欄に「第1希望のクラスであったか否か」という設問を追加しました。

## アンケート結果の分析

(1) 「共通事項」のSE平均値は、他の教養科目と比較しても高水準で、ここ数年の推移をみても、【時間】以外の設問で伸び続けています。トップ3をみると、

(表1)

質問事項		略称	
共通事項	問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。	【態度】
	問2	授業の目的を意識しながら学習することができた。	【意識】
	問3	教員の説明はわかりやすかった。	【説明】
	問4	教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。	【対応】
	問5	授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？	【時間】
	問6	成績評価方法について十分な説明があった。	【成績】
	問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。	【成果】
	問8	私はこの授業を受講して満足した。	【満足】
個別事項	問9	SE この授業テーマは自分の関心にあっていた。 TE この授業で学生がテーマに関心を持つように教えた。	【主題設定】
	問10	問題発見と、その解決に向けた取り組み姿勢の重要性を認識した。	【問題発見】
	問11	ディスカッションやプレゼンテーションなどの自己表現能力を向上させることができた。	【表現能力】
	問12	受講生による議論・調査・発表の部分に対し、教員によるテーマの解説部分の時間配分はどうでしたか？	【バランス】

※回答は5段階：強くそう思う（5）、そう思う（4）、どちらともいえない（3）、そう思わない（2）、全くそう思わない（1）

	平成20年	平成21年	平成22年
【対応】：	3.94	3.98	4.05
【態度】：	3.83	3.87	3.97
【満足】：	3.79	3.86	3.94

と4ポイント前後まで伸びていて、ワースト3でも、

	平成20年	平成21年	平成22年
【時間】：	2.32	2.44	2.41
【成績】：	3.32	3.31	3.48
【成果】：	3.39	3.47	3.56

と、さほど悪くない水準です。これらはそれぞれ

「SE平均値とTE平均値のギャップの少なさ」

のトップ3とワースト3にピタリと一致していて、このあたりが今後の課題といえるでしょう。ちなみに【満足】では、毎年、SE平均値がTE平均値を大幅に上回っています。

(2)「個別事項」のSE平均値の推移は、

	平成20年	平成21年	平成22年
【主題設定】：	3.72	3.78	3.83
【問題発見】：	3.68	3.79	3.84
【表現能力】：	3.53	3.68	3.71

という具合に、やはり高い水準で伸び続けていますし、

【バランス】では、「ちょうどいい」という回答が

	平成20年	平成21年	平成22年
	66.2%	67.8%	71.3%

という推移で、ついに7割を超えました。ただ、SE平均値とTE平均値のギャップが(1)のワースト3なみに大きく、縮まる傾向が見えません。とくに【表現能力】のギャップが大きいです。今後の課題といえるでしょう。

(3)「第1希望のクラスであったか否か」と授業評価アンケートの相関関係について、以下の項目で有意の差が現れました。

	【意識】	【満足】	【主題設定】
第1希望：	4.04	4.22	4.13
それ以外：	3.80	3.86	3.53

ただ、設問の字が小さかったため、半数以上の学生が設問に気がついていない可能性があり、来年度以降は「個別事項」欄に設問を移し、継続して調査を行います。

## 自由記述欄より

平成21年度までの授業評価を受けて、平成22年度に行った工夫として、

- ①専門的なテーマは避け、身近なテーマを選ぶ
- ②テーマを絞り、授業に余裕をもたせる

③宿題を減らし、作業時間を授業中にとる

④学生の自主的な発言・取り組みを促すなどの例がTEの自由記述欄に書かれています。関係していそうなSEの自由記述を拾ってみましょう。

①に関するSEの自由記述

- ・専門的すぎて興味がないとつらい
- ・ゼミの目的がわからない

②に関するSEの自由記述

- ・調査、議論、発表の時間が少なすぎる
- ・授業計画をきちんとたててほしい

③に関するSEの自由記述

- ・授業外で、学生同士が集まるのは難しい

④に関するSEの自由記述

- ・教員の考えをなぞるための授業ではない
- ・授業が説明ばかりで、プレゼンもなし

肯定的な意見が圧倒的に多いなか、このような厳しい意見は貴重です。上記の工夫とあわせて、心にとどめておくべきだと思います。最後に、SEの自由記述で代表的なものを挙げると、

- ・いろいろな学部の学生と触れあえて楽しい
  - ・教員と学生の距離が近いと感じた
  - ・レポートの書き方やプレゼンの方法を教わったなどで、とくに
  - ・前期の授業でいちばん楽しかった
- という意見が多いのには勇気づけられます。

## おわりに

基礎ゼミナールの授業評価結果をみると、学生の満足度も高く、授業の目的もある程度達成されていると思いますが、まだまだ課題もあります。これまでの担当教員の努力を無駄にしないためにも、基礎ゼミナール懇談会などを通じて、さまざまな情報を共有し、新しい意見も取り入れて、基礎ゼミナールのさらなる充実に努めていくべきだと感じます。

# 都市教養プログラムの現状と課題

## ー授業評価アンケート（2010年度前期）の解析からー

都市教養プログラム 部会長  
都市環境学部准教授

佐藤 潔

### 1 はじめに

本稿では本年度前期の授業評価アンケート集計結果の解析を通じて見えてきた現時点での「都市教養プログラム」の課題・問題点について述べる。

なお、紙面の都合上割愛した「都市教養プログラム」の特徴と変遷および現状、ならびに「授業評価アンケート」自体の課題・問題点についてはWeb版に全文を掲載しているので、そちらを参照して頂きたい。

### 2 授業評価アンケート結果

ここからは、アンケート結果について述べることにする。まず今回実施された学生側へのアンケートの質問項目を示す。

表1 学生側（SE）への質問項目

共通質問事項		
問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ	態度
問2	授業の目的を意識しながら学習することができた	意識
問3	教員の説明はわかりやすかった	説明
問4	教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた	対応
問5	授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？	時間
問6	成績評価方法について十分な説明があった	成績
問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた	成果
問8	私はこの授業を受講して満足した	満足
個別質問事項		
問9	この授業のシラバスは、「授業選択に役立つような内容」でしたか？	シラバス
問10	授業全体を振り返ってみて、あなたにとって「この授業の難易度」はどうでしたか？	難易度
問11	この授業を受講したことによって、「自分の視野が広がった」と思いますか？	視野拡大
問12	授業の内容や形態を考えると、「このクラスの人数」は適切であったと思いますか？	受講生数

注：教員側（TE）への質問内容は、上記と同様な事柄について視点を変えた文面であるので、ここでは省略する。

前回（H21年度後期）からの変更点としては、個別質問事項（問9-11）の文面を質問内容が明確になるよう変更したと「都市教養プログラム」に特有の問題の一つである受講生数に関する質問（問12）を追加した点である。なお、共通質問事項に関しては質問の対象が不明瞭なものや内容が重複しているもののあると感じるが、従来通りの内容で実施された。

次に回答分布を示すが、質問の順番と内容は対応している訳ではなく、回答選択肢も異なる質問項目（問5, 10, 12）もあるので、学生に対する質問項目の内容別に分類して整理した結果を対応する教員側(TE)の回答分布と共に示す。

学生側の回答と教員側の回答の乖離（意識・認識の差）については、個々の授業担当者に配布された結果を各自で判断してもらうことであるが、ここではFD委員会から渡された集計結果の資料に基づいて「都市教養プログラム」全体としての分布についてのみコメントする。

#### ・学生の自己評価に関する項目（問1, 2, 7, 11）

これらの項目に対する学生側(SE)の回答は、問11の「視野拡大」を除いて肯定的な回答が50%以下と低く、「基礎ゼミナール」や「情報リテラシー実践I」で見られるような高い割合とはなっていない。

一方、これらの質問に対する否定的な回答は「二重の意味」を持っていることに注意する必要がある。すなわち「学生自身の努力不足を反省している意見」と「授業内容に対する不満を表している意見」である。個別の授業においてこれらの質問事項に否定的な回答が多い場合は、授業担当者は授業内容の再確認や自由記述の内容を確認する必要があるだろう。

「都市教養プログラム」全体としては受講者の5,6人に1人が否定的な回答を寄せているが、プログラム全体として改善すべき点があるのかどうかについての判断は難しい。

なお、教員側(TE)の回答は否定的な意見が生じる要素がなく、ほとんど意味を持たない。

表2 学生の自己評価に関するSE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
態度	13%	36%	34%	13%	5%
意識	11%	35%	35%	14%	5%
成果	8%	32%	44%	11%	4%
視野拡大	21%	44%	26%	6%	3%

表3 学生の自己評価に関するTE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
態度	4%	59%	36%	1%	0%
意識	19%	64%	16%	1%	0%
成果	10%	62%	27%	1%	0%
視野拡大	21%	71%	6%	1%	1%

・教員・授業内容への評価に関する項目（問3, 4, 6, 10）

ここでも、問10の「難易度」を除き、教員側(TE)の回答は否定的な意見が生じる要素がなく、ほとんど意味を持たない。

問3,4,6に対する学生側の受け取り方は、50-60%が肯定的な回答であり、教員側の70-90%の肯定的な回答に比べると低く、全体としてみると教員側が思っている程、説明や対応が良かったと感じている学生の割合は少ない。

「難易度」に関しては、専攻の異なる学生が混在している教養科目であることを考えれば、全体としては適切なレベルであると判断される。

表4 教員・授業内容に関するSE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
説明	20%	40%	26%	9%	4%
対応	17%	35%	38%	6%	3%
成績	17%	31%	35%	12%	4%
	易しかった	やや易しかった	ちょうどよかった	やや難しかった	難しかった
難易度	3%	7%	58%	23%	9%

表5 教員・授業内容に関するTE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
説明	27%	63%	9%	2%	0%
対応	16%	61%	19%	3%	1%
成績	21%	50%	26%	1%	2%
	易しかった	やや易しかった	ちょうどよかった	やや難しかった	難しかった
難易度	0%	8%	60%	31%	1%

・シラバスに関する項目（問9）（問2,6,7とも関連）

問9は選択必修科目である「都市教養プログラム」科目において、シラバスに書かれている内容が授業選

択に役立つようなものであったかどうかについて、学生側の意見と教員側の意見の乖離があるかどうか調べるためのものである。従って、個々の授業において否定的な回答が多い場合には、授業担当者は自由記述の内容などを確認して、シラバス内容の修正が必要であろう。

また、FD委員会はこのようなアンケート調査を行う以上は、その様な授業の担当者に対して明確な注意を促し、次年度シラバスの提出の際に、修正の有無をチェックして確認することが必要であると思う。

表6 シラバスに関するSE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
シラバス	12%	37%	40%	8%	3%
意識	11%	35%	35%	14%	5%
成績	17%	31%	35%	12%	4%
成果	8%	32%	44%	11%	4%

表7 シラバスに関するTE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
シラバス	9%	74%	14%	2%	0%
意識	19%	64%	16%	1%	0%
成績	21%	50%	26%	1%	2%
成果	10%	62%	27%	1%	0%

・満足度（授業全般）に関する項目（問8）

この質問は具体的ではないので、学生の満足度の指標が何かを掴むことは難しいが、全体の回答分布が類似している項目を挙げると、「説明」と「視野拡大」が該当する。回答を寄せた個々の学生について詳しい相関を調べたわけではないが、これらの全般的な傾向から判断すれば、学生は「説明がわかりやすく、知らない分野に関する知識が獲得できた」ことに対して満足しているものと判断することができるであろう。

表8 満足度に関するSE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
満足度	22%	36%	30%	8%	4%
説明	20%	40%	26%	9%	4%
視野拡大	21%	44%	26%	6%	3%

表9 満足度に関するTE回答分布（H22年度前期）

	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
満足度	8%	54%	37%	1%	0%
態度	4%	59%	36%	1%	0%
成果	10%	62%	27%	1%	0%

一方、教員側の回答には「説明」や「視野拡大」との回答分布との一致は認められず、「態度」や「成果」

といった項目と類似する分布となっている。いずれも学生の受け止め方に対する教員側の推測を問うような質問項目であるので、これらの回答分布が一致するのは当然なのかも知れない。

本アンケートは「授業評価」を謳っている以上、学生側から見た「(総合的な)満足度」を高めるための分析やそれに基づいた改善がFD活動の目標の一つと考えられるが、この評価はあくまで(学生にとって)「満足できた授業」であり、「良質な授業」を必ずしも意味する訳ではないことに注意すべきであろう。

学生側の「授業満足度の基準」を知りたければ、満足度の高い授業と低い授業を10授業くらいずつ取り上げて、他の質問の回答傾向を調べれば、相関の高い要因を容易に見つけ出すことができる。(以前行われた解析では、「肯定的な回答を寄せる学生は、全ての項目に対して肯定的な回答を寄せる傾向にある」と統計的な傾向についてのみ説明され、その意味を示されていない事柄である)

だが、授業改善に役立てるのであれば、教員側としてはこの様な「(抽象的な)満足度」の比率調査よりも「何を改善してほしいのか」もっと具体的で直接的なことが知りたいはずである。

現在「自由記述」として手書きの記入欄が設けられているが、それらはワープロで打ち直されて、各授業担当者にアンケートの集計結果と共に送られているが、集計や傾向分析などは行われていない。

例えばこの5年間のアンケート調査で寄せられた自由記述を集計・分析して、頻度の高い類似意見を並べてマークシートで選択させる方式に変え、該当項目のない意見のみを「その他の意見」として記入させる様な方式をとれば、集計作業の大幅な効率化と授業改善点の具体的な事項の明確化が計れるであろう。さらに、複数選択した改善点の中から「最も改善してほしい点」を別途マークしてもらえば、次年度の授業に早急に改善すべき点が明らかになるはずである。

・授業外学習時間に関する項目(問5)

この質問項目は学生の自己評価というよりは、「実態調査」に近い内容である。他の全学共通科目との比較からわかる様に、「都市教養プログラム」の時間外学習時間は非常に低いレベルである。3人に2人が「ほぼゼロ時間」と回答している。

表10 授業時間外学習時間に関するSE回答分布(H22年度前期)

	0時間/週	30分程度/週	1時間程度/週	90分程度/週	2時間程度/週
基礎ゼミ	31%	27%	23%	9%	10%
都市プロ	64%	20%	11%	3%	2%
実践英語	21%	34%	28%	11%	6%
情報科目	60%	23%	11%	3%	3%
理工共通	27%	32%	27%	9%	5%

表11 授業時間外学習時間に関するTE回答分布(H22年度前期)

	0時間/週	30分程度/週	1時間程度/週	90分程度/週	2時間程度/週
基礎ゼミ	6%	30%	40%	16%	9%
都市プロ	29%	48%	17%	4%	2%
実践英語	0%	25%	51%	17%	7%
情報科目	27%	51%	19%	3%	0%
理工共通	5%	44%	35%	7%	9%

「都市教養プログラム」の時間外学習時間の低さは、経年変化をみても改善されていない。(初年度から2008年度にかけてわずかに向上しているがこれは選択肢の基準が1時間刻みから30分刻みになったためである)

また、教員側の回答も他の教養科目で見られるような時間の経年増加は認められず、「都市教養プログラム」科目では全体的に時間外学習を十分に課していない上に、改善の意識が薄いことがわかる。

表12 都市教養プログラム科目の授業時間外学習時間に関する回答(平均値)の経年変化

年度	2007		2008		2009		2010
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期
SE	1.35	1.28	1.55	1.51	1.60	1.59	1.59
TE	1.79	1.75	2.07	1.79	1.88	2.13	2.03

注: 数値は回答選択肢番号の平均値(2007年度は1-5がほぼゼロ時間, 1時間, 2時間, 3時間, 4時間程度/週、2008年度以降は1-5がほぼゼロ時間, 30分, 1時間, 90分, 2時間程度/週に対応)

単位の実質化が求められている中で、このような状況は個々の教員の判断に委ねるレベルの問題ではなく、「都市教養プログラム」科目でもどれ位の時間外学習の必要があることを授業担当者ならびに学生に具体的な数値(時間)と共に伝え、各授業において一定時間以上の時間外学習を必ず課す申し合わせや取り決めが必要であろう。

・受講生数に関する項目(問12)

「都市教養プログラム」科目では、授業ごとの受講者数の違いが大きい。(英語24名、情報科目50名前後(50-55名)、基礎ゼミ(7-24名)であるのに対し、都市教養プログラム科目の受講生数は10名程度から600名まで幅広い)

受講者数が200名を超える授業では、受講生数が

「ちょうどよい」と回答した割合が66.7%（3名に2名）を下回る科目が増え始め、270名を超えると1授業を除き66.7%以下となる。さらに330名以上の授業ではどの授業も半数以上の学生が受講生の数が多すぎると感じている。

逆に少人数の授業では受講生数が「ちょうどよい」と回答した割合が50%未満となるのは、履修登録者の少ない2つの授業のみであり、その他の授業は7割以上が適正な人数であると回答している。（50%を切る授業が100名前後の授業で1つ、200名前後の授業で2つあったが、教室の大きさが原因であると予想されるので、このようなアンケート調査結果は次年度の教室配置にも利用すべきである）

**表13 履修登録者数と「受講生数がちょうどよい」回答割合の関係**

受講生数	10-20	21-100	101-200	201-300	301-600
授業数	5	37	20	14	13
67%以上	1	35	14	4	0
67%未満	4	2	6	10	13
50%未満	2	0	2	3	10

この調査結果から読み取れることは、「都市教養プログラム」科目では、20名以上200名以下の授業規模が適当であり、300名を超えるような大規模授業は学生からは望まれていないことである。教室環境との対応や出席状況の確認が必要であるが、現状では「都市教養プログラム」科目の3割が200名以上の授業であるので、200名以上の授業でも受講生数が「ちょうどよい」と回答した割合が高い授業における好回答の要因を調べ、他の大規模授業の改善に役立てることが望まれる。

なお、受講生が集中する授業が生じる要因の一つに時間割配置が挙げられる。ここでは詳しいデータは省略するが、受講生数が300名以上の大規模授業の多くは同一時間枠に他の「都市教養プログラム」科目のない大枠配置以外の授業時間に集中している。

現在の様な学部・系・コースによる履修要件の不統一や授業配置の原則と多くの例外が混在する状況では、履修人数の制限を設けない限り問題は解消しないであろう。学生の授業選択肢がある程度確保される様な時間割配置の調査と履修要件の全学的な統一が望まれる。

### 3 おわりに

「授業評価アンケート」の意義や必要性自体を否定する気は全くないが、これまでのやり方では「集計」から先のサイクル（「集計」→「解析」→「問題点の把握」→「原因の特定」→「具体的・有効的な対策」→「授業

の改善」→「評価」→「集計」…）が回っていないために、アンケート結果の傾向は毎回同じである。（勿論、傾向が同じことは数年の調査を繰り返したから分かることであるが、これ以上同じことを繰り返しても得られることは少ないはずである）

「授業評価アンケート」に限っていえば、FD委員会の活動内容自体に改良・改善の努力が目に見える形で感じられない状況下で、授業改善を教員に一方的に求めると説得力に欠けるであろうし、アンケート結果が毎年の授業改善の動機付けになることはないであろう。

「授業評価アンケート」自体を見直す時期はすでに訪れている。早急に有効な対策を取らずにこのままの形式で今後も続けたならば、FD制度自体が崩壊しかねないことを関係者にはもっと感じてもらい、速やかに行動に移してもらいたい。

最後に、本稿は本学FD委員会からの要請により作成したものである。作成にあたっては、管理部教務課教育支援・評価係の市川氏ならびに管理部教務課の鈴木係長、白岩氏にデータ収集・整理に多大な協力を頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。



# 実践英語教育

## 授業評価の検討とこれからの展望

英語教育分科会座長

都市教養学部人文・社会系教授

福間 健二

### (はじめに)

わたしたちの「実践英語」も、2010年度で6年目を迎えた。

1年次の初めの「クラス編成テスト」によって、A・B・Cのレベルに分かれる能力別クラス編成がなされる。

そして、選択制を取り入れた日本人教員担当の2年次のⅡa・b以外、つまり、日本人教員の担当するⅠa・b、NSE教員の担当するⅠc・dとⅡc・dは、共通教科書を用い、統一期末試験をおこなっている。

わたしたちが学生の意欲と能力を向上させようと考えて積み重ねてきたここまでの試行と経験が、どう功を奏しているか。その一方で、学生に通じにくいのは、どういうところなのか。

2010年度前期、実践英語Ⅰaの授業評価アンケートを検討しながら、そうしたことを確認するとともに、首都大学東京での英語教育のこれからの方向性を考える目安となるものを探ってみよう。

### (個別質問事項について)

問9では、共通教科書の「難易度」について、問10では、それを使った授業のなかで「いちばん関心をもって取り組むことができたものは何ですか。」と尋ねている。

これは、もちろん、次年度以降の教科書を選ぶ上での参考にするためであるが、根本的なところでは、共通教科書の採用そのものがどう受けとめられているかを知りたいという意図がある。

2010年度、実践英語Ⅰaに採用したReading Explorer 3は、初版であることもあって印刷上の不備などがあり、教員にとっては使いにくい一面があったのであるが、難易度についての学生の回答は、従来よりも「ちょうどよい」が増えており、また、共通事項の質問への回答からも、学生がこの教科書を好意的に受けとったことが想像できる。

たしかに、この教科書は、一方で問題をもちながらも、現在の世界のさまざまな問題を扱った題材の選択

とレイアウトに斬新さのあるものだった。

関心主題を尋ねる問10への回答は、「内容理解」を選んだものが圧倒的に多く、そのあとに「英文和訳」「構文理解」「語彙の学習」とつづく。

2010年度にかぎったことではないが、こうした受け取り方は、英語を読んできちんと内容を理解するという授業の基本的な方向づけからすれば、妥当なものである。

問11の「学習貢献」の項目。

そこで、「この授業は、今後のあなたの英語学習に資するところがあった。」というのは、まず、現在の社会では、どんなかたちであれ、だれにとっても、英語を勉強してゆくことが必要であるという前提に立っている。とくに1年生の前期の段階で、学生が自分の英語との関わりに対して積極的な意欲をもつことの重要性は、言うまでもない。

2010年度の回答の、「強くそう思う」「そう思う」を合わせた全体の41.7%というのは、まだ高いとはいえない。しかし、これは、平均値で見ると3.28となり、2009年度の3.1からすると伸びている。2009年度とほぼ変わらない教員の見解(4.16)とのあいだの開きも狭まっている。

### (共通の質問項目について)

問1 「態度」：「私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。」

平均値で、2007年(3.36)、2008年(3.41)、2009年(3.43)と横這いをつづけてきたのが、2010年度は、3.56となった。学生がこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいたかという教員側の観察は、過去4年がいちばん高かった2009年度とほぼ同じ3.79である。学生の授業態度は向上していると見ることができるだろう。

問2 「意識」：「授業の目的を意識しながら学習することができた。」

2007年(3.24)、2008年(3.29)、2009年(3.26)であったのが、この項目でも、2010年は、3.43と伸びている。そうするように促したかどうかについての、

教員の回答（2010年は4.20）とはまだ開きがあるとしても、意識的に学習する学生は増えていると見たい。

問3 「説明」：「教員の説明はわかりやすかった。」

2007年（3.31）、2008年（3.59）、2009年（3.58）に対して、2010年は3.69。わかりやすく説明したかどうかについての、教員の回答（2010年は4.27）との差は大きい。学生に通じる説明をさらに工夫してゆく必要があるだろう。

問4 「対応」：「教員の学生の質問・意見に対して適切に対応していた。」

2007年（3.53）、2008年（3.79）、2009年（3.68）に対して、2010年は3.84。教員の回答は4.31であるが、この項目では教員の努力への評価が高くなっている。

問5 「時間」

1週間の学習時間。従来から、学生の学習時間は、一般的に考えても、教員の期待する1時間程度ということからしても、短すぎると懸念されている。この項目に関しては、2010年も、あまり大きな変化は見られない。

問6 「成績」：「成績評価方法について十分な説明があった。」

2010年度は、3.74。十分な説明をしたかということへの教員の回答は、4.34。開きはまだある。周知徹底への努力はなされてきたが、期末試験70%・平常点30%としている平常点の内容について、教員の考えが学生によく伝わっていないという問題があるかもしれない。

問7 「成果」：「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。」

2010年、学生が3.23。教員3.79。学生・教員の双方とも、他の項目に比べて、低い数値である。従来からそうであり、目標そのものを検討する必要もあると考えられる。

問8 「満足」：「私はこの授業を受講して満足した。」

2007年（3.19）、2008年（3.35）、2009年（3.3）であったのが、2010年は3.47と伸びている。問1「態度」と問2「意識」とともに、よろこぶべき数値である。とはいえ、満足したとする学生が全体の半分を少し超えているという程度である。教員の回答（2010年、3.53）からも窺えるように、もっと多くの学生が満足できるようにするにはどうしたらいいのかということ、これからさらに、さまざまな角度から考えてゆく必要がある。

#### （これからの展望）

今回見ることでできた2010年度1年生の回答は、こ

こまで「実践英語」をやってきたわたしたちにとって、大きな励ましとなるものである。

教科書がおもしろいものだったこともあるが、「実践英語」の5年間の経験が活きて、授業内容が充実してきた。それが、全体として、学生の授業態度、学習意欲を向上させている。そういう成果をいちおう認めていだろう。

しかし、その一方で、もちろん、まだまだ反省すべき点はある。教員の側に工夫の余地があるばかりでなく、学生も、どの分野に進むにせよ、英語学習の重要性を認識して、さらに真摯に授業に向かってほしい。

現在、わたしたちは、「実践英語」の授業内容、共通教科書、統一試験などについての見直しを始めようとしている。

自分の思っていることを英語で言い、英語で書く。さらには、自分の必要とする英語の情報を、英語を使って求め、正確に理解する。そして、国際的な視野と自分の意見をもって英語に親しみ、積極的に、怯むことなく英語に向かってゆく。

そういう学生がひとりでも増えてゆくことを願いながら、改善すべきことは改善し、さらに努力を積み重ねてゆきたい。

# 情報リテラシー実践Ⅰにおける授業評価の経年変化

情報教育検討部会部会長  
大学教育センター教授

永井 正洋

## はじめに

本稿では、2008年度から2010年度前期末に行った情報リテラシー実践Ⅰに関しての授業評価アンケート(SE)の経年変化について主に報告する。

高等学校では、現行の学習指導要領が平成11年に告示され、平成15年度より実施されている。大学等高等教育機関には、これにしがたい教育を受けた学生が平成18年4月に初めて入学した。現行の高等学校学習指導要領では、教科「情報」が置かれたことが1つの特徴となっているが、先行研究では、これにより、大学入学時の学生のコンピュータリテラシーが、向上していることが期待されてきた。

そこで、筆者ら大学教育センター情報教育担当は、大学で情報教育の授業を受ける学生のレディネスがどのような状態であるのかを明らかにするために、これまで毎年、レディネス調査を4月の段階で実施してきた。結果的に多くの調査項目で向上が認められ、学生の情報やコンピュータに関して使えるという意識は、徐々に高まってきていると考えられる。しかしながら、多くの項目で未だできるという回答が全学生の50%を超えておらず、その意味であまり身に付いていないと学生は認識しているようである。更に、客観テストからは、本学は他大学と比較すると、有意に低い得点となっており、基本的な情報リテラシーを欠く状態であることが分かっている。

ここで、本学の基礎教育課程では、主に基礎・基本的な情報活用能力の育成をねらって情報リテラシー実践Ⅰを設けているが、その内容は、標準として、『情報倫理、コンピュータやネットワークの仕組み、e-mail、Web検索、文書編集、表計算、プレゼンテーション』といった学習項目から成り立っている。したがって、前述のような状態で学生のレディネスが数年間、推移していることを考えると、上記内容は適当であることが推察されるが、本稿では実際に、どのように授業が評価されてきたのか経年変化を追うなかで、基礎情報科目としての情報リテラシー実践Ⅰの有効性などについて述べてみたい。

## 方法

まず、アンケートの質問項目だが、共通項目が問1～8、個別質問項目が問9～12となっている。この個別質問項目は、情報教育検討部会にて設定されるが、2010年度と、それ以前とは異なっている。次に回答方法に関しては、3年間とも、eラーニングシステムを用いてアンケートを実施しているが、SEでのシステム利用のクラスの割合は89.5% (2008年)、97.3% (2009年)、97.4% (2010年)となっており、ほとんどのクラスで利用されている。また、TEについても84.6% (2008年)、96.0% (2009年)、86.7% (2010年)と同様の傾向である。

次に、3年間の授業評価アンケートの実施状況を示す(紙面の関係上、SE：学生による授業評価のみ)。

### 【2008年度】(SE)

実施時期：2008年7月7日～7月22日

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収数/人数：1494人/1751人 (85.3%)

方法：BlackBoard (35クラス)、マークシート(4クラス)

### 【2009年度】(SE)

実施時期：2009年7月6日～7月23日

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収人数/全人数：1376人/1722人 (79.9%)

方法：BlackBoard (38クラス)、マークシート(1クラス)

### 【2010年度】(SE)

実施時期：2010年7月9日～7月22日

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収人数/全人数：1458人/1682人 (86.7%)

方法：BlackBoard (37クラス)、マークシート(1クラス)

## 結果と考察

図1は、2008年度から2010年度前期末に行った情報リテラシー実践Ⅰに関しての授業評価アンケート(SE)の共通項目に関する経年変化を表している(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ )。なお、この分析では、2009年度、2010年度は、再履修クラスと分析に同意していない学生等を除

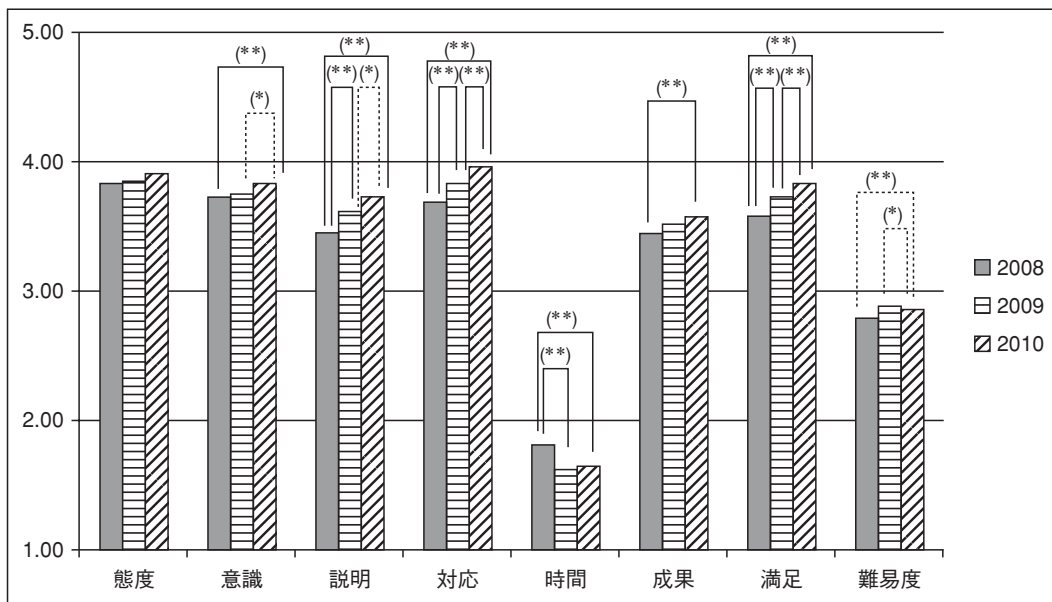


図1：2008～2010年度 SE回答の経年変化

外しており、2008年度は再履修クラスのみを除外している。

全体的に、年を追うごとに授業への意識が向上していると共に、その多くは有意な差として表出していることが分かる。具体的には、授業に意欲的・積極的に取り組んだかという「態度」と授業の目的を意識しながら学習することができたか問うている「意識」については、「意識」に関して、若干の向上が見られるものの余り顕著な動きはなく、学生の授業に対するインセンティブは、4ポイント弱という比較的、高い位置で安定しているといえる。次に、教員の学生への「説明」と「対応」に関しては、上昇傾向が顕著であるが、このことは教員の授業に対する意識の改善と教育技術の向上によるものではないかと推察する。これと比べ、授業によって、シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できたとする「成果」に関しては、若干、有意差が見られるものの、緩やかな伸びとなっており、加えて、他の項目より低めのポイントとなっているので、結果として身についた知識やスキル等の情報リテラシーに関して、若干、自信のなさが表出していると考えられる。更に、図2は、2009年までの、コンピュータリテラシーの定着に関する意識を表しているグラフであるが、前半2年（2006、2007）より、後半2年（2008、2009）の方が、低い傾向にあることが分かる。

このことは、コンピュータ教室のOSや授業用ソフトウェアの更新、また、利用教室の増加に伴う、一時的な学習環境の違いが要因として推察されるが、いずれにしても、注視し、その要因を調べ検討する必要がある。

と考えている。

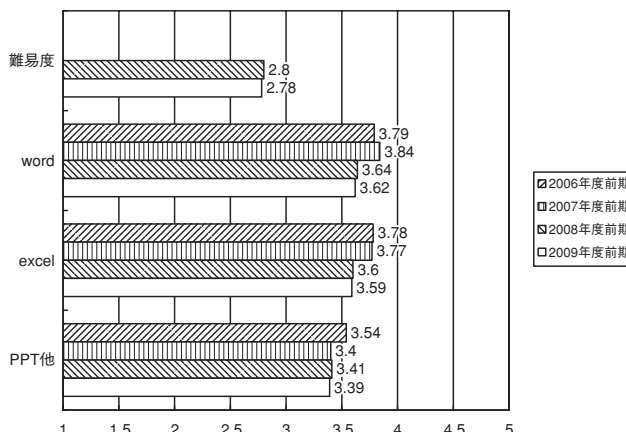


図2 コンピュータリテラシーの定着に関する意識

次に、難易度については、3ポイントを基準として、適切な難易度としていることを考えると、現在の基礎・基本的な学習内容が、学生は妥当であると回答していることが分かる。反面、課題としてあげられるのは、授業時間外での学習である。これはどちらかというと年々、下がり気味の傾向となっており、単位制度の実質化の観点からも、何らかの対策を検討する必要がある。

最後に満足度に関しては、有意に回答が上昇しており、問題ないと考えられるが、今後は、このことが、先にあげた情報リテラシーや授業時間外学習の向上につながるよう手立てを考えたい。

# 理工系共通基礎科目の授業評価結果について

理工学系FD委員会委員長  
都市教養学部理工学系教授

加藤 直

## はじめに

「理工系共通基礎科目」とは、全学部学生を対象として都市教養学部理工学系が提供している授業科目で、数理科学関係（18）、物理学関係（11）、化学関係（5）、生命科学関係（6）、電気電子工学関係（6）、機械工学関係（4）の6分野からなる（括弧内の数字は2010年度の各分野の科目数）。名前が示す通り、自然科学各分野の基礎的な概念や方法を身につけるための科目である。上記の中には複数クラス開講している授業も多く、2010年度前期の授業評価アンケートの回答は、63クラス（96.9%）計3,514名（69.6%）の学生から寄せられている（括弧内は回収率）。ここではこれらの結果と過去3年半の経年変化について概観し、今後の課題を考える。

## 共通の質問項目の評価結果と経年変化

表1に共通の質問項目（問1～8）に対する学生の評価結果を示す。「時間」以外の質問項目の選択肢は、5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらとも言えない 2. そう思わない 1. 全くそう思わないであり、自身に対する評価である問1を除くと、5または4を選択した学生（表の3行目）は半数以下であることがわかる。「時間」（週当たりの授業以外の学習時間）についての選択肢と回答の内訳は

5. 2時間以上：5.0% 4. 90分程度：9.1%  
3. 1時間程度：26.8% 2. 30分程度：31.5%  
1. ほぼ0時間：27.1%

となっており、学習時間がほぼ0時間と30分程度の学生がそれぞれ3割前後もいることがわかる。

表1 共通の質問項目の評価結果(学生)

問	1	2	3	4	5	6	7	8	
項目	態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	
	5+4(%)	54	45	44	48	14	43	34	43
	平均値	3.5	3.4	3.2	3.4	2.3	3.4	3.2	3.3

「時間」「満足」に対する評価結果を、他の科目群と比較したものを表2に示した。「時間」は都市プロや情リテに比べてはるかに多し、「満足」はこれらに比べてかなり低い。これは、ある程度時間をかけて勉強しなければ理解できない理工系基礎科目の性質を反映しているとも言える。表2の傾向は過去3年半で大きくは変化しておらず、各科目群の特徴が端的に表れている。

表2 他の科目群との「時間」「満足」の平均値の比較

	基礎ゼミ	都市プロ	実践英語	情リテ	理工共通
時間	2.4	1.6	2.5	1.6	2.3
満足	3.9	3.6	3.5	3.8	3.3

図1に問1～8についての経年変化を示す。前期は4回、後期は3回のデータなので、前期だけで比較した場合、昨年度までは、ほとんどの項目で評価が上昇し続けており、教員の授業改善への努力が少しでも報われたと考えられるが、昨年度と今年度ではほとんど変化がなく、頭打ちになっていることがわかる。「時間」については、今年度初めて減少に転じている。

## 個別の質問項目の評価結果と昨年度との比較

理工学系で用意した個別の質問項目（問9～12）は下記の通りである

**問9** 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？

(1. 少なすぎる 2. 若干少ない 3. ちょうどいい 4. 若干多い 5. 多すぎる)

**問10** 快適な環境下でこの授業を受けることができた。

**問11** この授業テーマは自分の関心にあっていた。

**問12** 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？

(1. 難しい 2. やや難しい 3. ちょうどいい 4. やや易しい 5. 易しい)

これらの評価結果を昨年度の結果と共に表3に示す。

表3 個別の質問項目の評価結果（学生） (%)

問	9	10	11	12
項目	人数	環境	関心	難易度
2009年度	69	37	35	48
2010年度	64	30	35	49

ただし選択肢の性質上、問9は1～3の合計（多いとは思っていない人）、問10と11は、5と4の合計、問12は3～5の合計（難しいとは思っていない人）を百分率で表している。受講人数と教室環境については、大学側の改善努力にもかかわらず、評価はやや下がっていることになる（もちろん回答する学生は毎年変わる）。問12で授業が難しいと感じている学生が半分以上いることは、昨年度とほぼ同じである。問5で学習時間が30分以下の学生が6割近くいることを考えれば、当然の結果とも言える。

今後の課題

表2が示すように、他の科目群に比べて、理工系共通基礎科目は学習時間を割いている割には満足度が低いという特徴があり、これはこの科目の宿命とも言える。それでも多くの教員は、如何に学生に興味を持たせ、如何に難しい概念をわかりやすく説明し、如何に学生に勉強させるかということに日々頭を悩ませている。この3年半で、良い方の評価が頭打ちになり、学習時間が減少に転じていることは、以前にも増して努力を続ける必要があることを示唆している。勉強しなければわからないのは当然であるので、特に「時間」について分析し、今後の推移を見守る必要がある。ただしこれらはあくまで平均値であるので、個々の教員は、個別に通知される評価結果の中で、特に「時間」が昨年度と比べてどう変化しているかに留意し、それに応じて対策を練ることが必要と考えられる。

